学級活動を生かしたよりよい人間関係づくりの推進

－生徒のコミュニケーションスキルを高める活動を通して－

栗原市立若柳中学校　　平山　俊太

１　主題設定の理由

(1) 授業づくりに関わる課題

これまで私が行ってきた学級活動では、ねらいや生徒の実態を踏まえた授業が実践できておらず、行事の動機付けのための話合い活動を行うなど場当たり的な授業になっていた。また授業でエンカウンターやソーシャルスキルトレーニング、情報モラルの内容を扱うこともあったが、単発的な実施になっていた。

(2) 生徒の実態

生徒の実態を把握するための客観的な指標として下記の項目でアンケートを行った（表１）。

質問項目	とてもそう思う%	少しそう思う%	あまりそう思わない%	まったくそう思わない%
1　クラスの人たちは、あなたに声をかけてくれたり、親切にしてくれたりしますか	74	26	0	0
2　クラスの人から好かれている、仲間だと思われていると思いますか	39	51	9	3
3　運動や勉強、行事などでクラスの人から認められることはありますか	44	40	12	6
4　クラスの中にあなたの気持ちを分かってくれる人がいると思いますか	71	25	3	3
5　あなたが何かしようとするとき、クラスの人たちは協力してくれたり、応援してくれたりしますか	65	34	3	0
6　クラスの誰とでもコミュニケーションを取ることができますか	20	16	47	19
7　クラスメイトや友人と会話をするとき、自分の考えや思いを伝えることができていますか	33	43	19	6
8　クラスや学校生活、日常生活で多くの人とコミュニケーションが取れることは、今後の生活に役立つと思いますか	89	12	0	0

表１　アンケート結果（令和６年５月22日実施、小数第一位を四捨五入）

アンケート結果から、お互いを認め合ったり、助け合ったりできる生徒が多いことが分かった。この結果は、野外活動や体育祭等の行事を協力しながら取り組む姿からも、一人一人が仲間を大切にしようという雰囲気を持つ学級であることが分かる。しかし、学校生活や日常生活でコミュニケーションの重要性を感じているものの、特定の人とコミュニケーションを取ることに対して苦手意識を持っていたりする生徒も一定数いることが分かった。

４月の授業では、生徒たちのペア活動や班活動が滞る場面が多く見られた。その理由について生徒たちに尋ねたところ「会話の始め方が分からない」「話したことがない相手との会話に不安を感じる」「自分の気持ちを上手く伝えられない」「相手の気持ちを推測できない」等の課題を抱えていることが分かった。また、一部のペアはスムーズな活動ができていたように見えたものの、実際には「一方的な会話」「聞き手の無反応や無関心」等の活動に一部なっていることが確認できた。

これらを踏まえ、生徒が適切なコミュニケーション方法について折に触れて考えたり、考えたことを実践したりする機会を設けることで生徒同士のコミュニケーションスキルの向上を目指し、人間関係の固定化やコミュニケーションに対する苦手意識の解消につなげていきたい。そして、生徒のコミュニケーションスキルを高めることで、生徒同士のよりよい人間関係づくりにつなげていきたいと考え、本主題を設定した。

(3) 本研究主題と副題の定義

本研究主題と副題に関する用語を以下のように定義する。

① 「よりよい人間関係」とは、生徒が他者を尊重したり思いやりを持ったり、互いのよさを認め合ったりしながら、学級の課題に対して協力できる関係のこと。

② 「コミュニケーションスキル」とは、人と人がお互いの考えや感情などを伝え合う技術のこと。また、確かな自己理解、他者理解に基づいて、伝えたり受け止めたりする技術のこと。

２　研究の目的と方法

(1) 研究の目的

生徒のコミュニケーションスキルを高めることで、生徒同士のよりよい人間関係づくりにつなげる。

(2) 研究の方法

研究主題に迫るため、次の３つの手立てを講じて授業実践を行い、授業後に生徒の記述や学習記録、アンケートの結果から、生徒同士がよりよい人間関係形成につなげることができたかを検証する。なお、本研究の対象は、本校第１学年１組生徒 31 名である。

①　生徒の興味・関心を高める題材の工夫

事前アンケートの結果を全員で共有したり、生徒がイメージしやすい身近な題材を取り扱ったアサーショントレーニング等の活動を行ったりすることで、生徒の興味・関心を高めながらコミュニケーションスキルの向上を目指す。

②　対話的な時間の確保

自分の考えをまとめる時間や振り返りの時間を確保することで、自己との対話を深めるとともに、他者との対話を通じて多様な視点を共有する場面をつ

くる。さらに、効果的にＩＣＴを活用することで、多様な考えに触れる機会を増やし、相互理解を深めることでコミュニケーションスキルの向上につなげる。

③　R-ＰＤＣＡサイクルを生かした学習過程

生徒が自己の思考の整理や現在の課題を分析するためにマインドマップ等の手法を用いる。また、生徒がコミュニケーションスキル等のよりよい人間関係づくりにおける課題を把握し、課題解決方法を意思決定し、課題解決に取り組む。そして、その結果を振り返り、自己を客観的に評価することで、次の活動につなげていく。

３　授業実践Ⅰの結果と考察

(1) 実践内容の概要

実践日	令和６年６月 27 日（木）２校時
対象	第１学年１組 31 名
ねらい	身近な事例を通して、適切な伝え方について考える。

生徒は本時までによりよい人間関係づくりのためには他者と適切なコミュニケーションを取ることが重要であることを学習してきた。本時はコミュニケーションの「伝える」ことに焦点化し、授業を行った。適切な伝え方を「相手の気持ちを大切にしながら自分の気持ちや考えを適切に伝える方法」と定義する。

(2) 研究に関わる実践の詳細

①　生徒の興味・関心を高める事例の工夫

生徒の興味・関心を高めるため、中学校生活の一場面を事例として以下の内容を設定した。

【Ａさん、Ｂさん（部長）】

Ａさんは部長のＢさんに新人大会に向けた部活動の取組として「体力トレーニング」を提案しました。なぜならＡさんは今の部員の状況を考えると、体力トレーニングが必要と考えたからです。そのようなＡさんの提案をＢさんは受け入れ、１週間後までにＡさんに練習メニューを考えてもらうことにしました。それからＡさんは毎日、効果的な練習メニューについて考えていました。

ところが１週間後、Ａさんが「体力トレーニング」について部員全体に伝える直前に、Ｂさんが「やっぱり体力トレーニングは家でもできるから、実践的な練習を中心にやっていこう」と言いました。

このとき、あなたがＡさんならＢさんにどのように伝えますか？

事例について生徒は自分が考えた適切な伝え方によって相手がどのような気持ちになるのかを考察した。さらに適切な伝え方が状況によって変わることや同じ言葉でも人によって感じ方が異なることを確認した。

②　対話的な時間の確保

自己との対話の時間と、他者との対話を行う時間を十分に確保した。また、生徒の意見をテキストマイニングで集約し可視化することで多様な考えに触れる機会と時間を確保した。

(3) 成果

①　生徒の興味・関心を高める事例の工夫

部活動という身近な事例を設定したことで、生徒は興味・関心を持って課題に取り組むことができていた。また、設定の中で人物の関係性や状況等を丁寧に説明したことによって、生徒は適切な伝え方を十分に考えることができた。

②　対話的な時間の確保

生徒の振り返りにおいて下記のような内容が見られた。自分の考えをまとめる時間を十分に確保することで生徒全員が適切な伝え方を考えることができた。適切な伝え方についてグループで共有したり、実際に伝えてみたりすることで自己の考えを調整しようとする姿が見られた。

- 話し方を変えることは悪いイメージがあったけれど、考えてみれば大切なことなんだろうなと感じた。
- 言葉を伝えるにも人それぞれの伝え方があるし、その相手に合った伝え方があることが分かった。けんかは起きない程度で、怒らないで、柔らかい感じで伝えることがいいなと思います。
- 相手に伝えることは難しいなと思った。これから相手に伝えるときは意見をちゃんと言ったり、聞いたりすることが大事だなと感じた。

(4) 課題

①　事例の内容について

本時の事例では予想以上にＢさんの行為に対して不満を抱く生徒が多く、Ｂさんへの指摘が多くなってしまった。これにより、相手を尊重した表現を考える機会を失ってしまった生徒もいたのではないかと考える。よって、相手を尊重した表現を考えさせられるよう、事例の内容について慎重に吟味する必要があった。

②　適切な伝え方について

生徒の振り返りを見ると「自分の言いたいことを我慢する」「あえて伝えない」と書いていた生徒が５名いた。自分の言いたいことを伝えないことによってどのようなことが生じるのかを考えさせる必要があった。

③　ＩＣＴの活用について

本時は対話の時間が想定よりも延びてしまった。ＩＣＴを効果的に活用し短時間で多様な意見を共有することで、まとめの時間を確保することができたと考える。

４　授業実践Ⅱの結果と考察

(1) 実践内容の概要

実践日	令和６年 10 月 21 日（月）２校時
対象	第１学年１組 31 名
ねらい	生徒一人一人がよりよい学級にするための自己の課題を考え、他者参照することでよりよい課題解決に向けた意思決定ができるようにする。

本題材ではよりよい学級にしていくために４月に設定した学級目標について考える。生徒一人一人が学級目標を達成するための課題を見付け、どのように解決していくかを意思決定し、実践していくことでよりよい学級づくりにつなげていきたいと考えた。

(2) 研究に関わる実践の詳細

①　R-ＰＤＣＡサイクルを生かした学習過程

・Ｒ（Research）

事前の指導では、生徒が題材に対して問題意識を持てるようアンケートを実施したり、教師が学級委員、班長と話合いを行ったりする。学級委員等と一緒に学級の現状を確認し、その内容を全体に共有することで生徒の問題意識の向上を図る。

・Ｐ（Plan）

本時では適切に自己の課題を分析するための情報として、事前アンケートの結果を参照したり、テキストマイニングを活用したりする。生徒は学級目標を達成するための自己の課題を認識し、課題解決方法を意思決定する。

・Ｄ（Do）

生徒が課題解決に向けて意思決定した内容を実践する。

・Ｃ（Check）

事後の指導では、生徒は実践結果を振り返り、自己を客観的に評価することで、次の活動につなげていく。

・Ａ（Action）

振り返りを踏まえ、生徒は必要に応じて課題解決に向けて意思決定した内容を修正し､再度実践する。

②　他者参照を取り入れた対話的な時間の確保

自己との対話や他者との対話を行う時間を十分に確保する。また、オンライン表計算ソフトを活用することで生徒は級友の課題や課題解決方法を他者参照できるようにする。それにより多様な考えに触れさせることでよりよい課題解決方法を意思決定につなげられるようにする。

(3) 成果

①　R-ＰＤＣＡサイクルを生かした学習過程

・事前アンケート結果を共有したことで、生徒が本時への学習意識を高めることができた。

・「よりよい人間関係づくり」を「よりよい学級」と捉えさせ､「学級目標達成のために必要なことは何か」と本時のＧ（ゴール：本校の授業での統一事項。生徒視点で考えたときに授業終了後、どのようなことができていればよいのかを示す）に設定することで生徒の課題解決意識が高まったように感じた。結果として、学習活動にスムーズに取り組むことができた。

・よりよい学級にするために学級目標達成に必要なことを検討することが効果的だった。また、その際にテキストマイニングを使用することで効率的に意見を集約することができた（図１）。

・コミュニケーション　　・みんな元気
・思いやり　・仲良く　・協力　・平等に
・クラスの全員と話せる　・嫌なことを言わない
・意見を聞く　・メリハリ　・健康　・笑顔

図１　テキストマイニングでの集約結果

・生徒たちに事前アンケートの結果やテキストマイニングで集約した意見を提示したり、生徒たちがオンライン表計算ソフトに入力された意見を他者参照したりすることによって、よりよい課題解決方法を考えるための参考にすることができた（図２）。

G：みんなが学級目標を達成するために一人一人が課題を設定し、課題を解決するための方法を決定できる。			
名前	自分が取り組む解決方法 (個人で考えた結果)	自分が取り組む解決方法 (最終結果)	振り返り
	テンションのメリハリをつけ、クラスの全員と平等に接する(静かに話を聞く時は聞いて、盛り上がる時は盛り上がる)	静かに話を聞くときは聞いて、盛り上がるときは盛り上がるなどのメリハリを大事にしクラスの全員と平等に接することで、普段の授業が楽しくなったり、クラスの仲がより深まると思いました。	普段の生活や授業（トークタイムや友達との会話）でコミュニケーションをいっぱい取ることが大切だとわかりました。
[redacted]			
	みんなが意見を出しやすい、話しやすい雰囲気を作る	相槌をしたり頷いたり、目を見て話を聞いて話しやすい雰囲気をつくる	メリハリやトークタイムなどを工夫してやって学級目標に近づけたいと思いました

図２　オンライン表計算ソフトの構成と生徒の入力内容

②　対話的な時間の確保

・生徒が主体的に話合い活動できるように、班での話合い活動で教師は時間と大枠のみを指示した。各班が班員の特性を生かして、スムーズに話合い活動を行っていた。活動が滞っている班については、教師と生徒が以下のようなやりとりを行うことで、話合い活動が活性化した。

※Ｔ：教師　Ｓ：生徒
①Ｔ「(生徒が設定した課題に対して) ～ってどういうことかな？」
Ｓ「分かりません」Ｔ「班員に相談してみよう」
②Ｔ「仲良くするって具体的にどういうことかな？」　Ｓ「～～～だと思います」
Ｔ「お！具体的に考えられていていいね！
班員のみんなも今みたいに質問してみよう」

・生徒は班での話合い活動を基に自己の課題解決方法を見直した。それにより、多くの生徒が自己の課題解決方法を具体的に考えることができた。

(4) 課題

①　課題解決方法の固定化

教師が想定した以上に、課題解決方法について似通ったものがあった。その原因として、オンライン表計算ソフトに入力された特定の生徒の考えが他に影響を及ぼした可能性がある。

よって入力するシートの生徒の名前を非表示にするなど、工夫が必要であると考える。

②　班活動について

先行授業では、班員は発表者に対してアドバイス等をするよう指示をしたが、活動が滞る班が多かった。他者が考えた課題解決方法に対して、改めてアドバイスをするということは生徒にとって難しいことが分かった。そこで、本時では発表者に対してアドバイスではなく共感や質問をするよう伝えることで生徒は心理的ハードルが下がり、スムーズに活動でき、班活動が活性化した。

５　研究の成果と課題

(1) 検証

５月と 11 月にアンケート調査を実施し､結果の比較を行った（表２）。全体的に肯定的に回答する生徒の割合が増加していることが確認できた。特に、コミュニケーションスキルに関連する項目６、７について肯定的な回答の割合が大きく上昇していることから、生徒のコミュニケーション力が向上していることが示唆される。さらに、よりよい人間関係に関連する項目１～５では項目４以外について肯定的な回答が増加していることから、生徒のコミュニケーションスキルの向上がよりよい人間関係づくりに相関が見られたことが示唆される。

項目４について、５月段階の肯定的な回答から否定的な回答（または「とてもそう思う」という回答から「少しそう思う」と回答）した生徒に理由を尋ねたところ「人の気持ちを理解することは難しいと感じているから」「気持ちを分かろうとしてくれる人はいるけれど、自分の気持ちを完全に分かってくれる人は少ないと感じているから」等の回答を得た。このことから項目４の否定的な回答が増加した理由は生徒同士の人間関係が悪化したのではなく、学校生活を通して生徒が他者の気持ちを理解することの難しさ等を経験から学んだことが影響していると考えられる。

質問項目	とてもそう思う%	少しそう思う%	あまりそう思わない%	まったくそう思わない%
1　クラスの人たちは、あなたに声をかけてくれたり、親切にしてくれたりしますか	81（＋７）	20（－６）	０（±０）	０（±０）
2　クラスの人から好かれている、仲間だと思われていると思いますか	50（＋11）	42（－９）	10（+1）	０（－３）
3　運動や勉強、行事などでクラスの人から認められることはありますか	46（＋２）	43（－３）	13（+1）	０（－６）
4　クラスの中にあなたの気持ちを分かってくれる人がいると思いますか	57（－14）	35（＋10）	10（＋７）	０（－３）
5　あなたが何かしようとするとき、クラスの人たちは協力してくれたり、応援してくれたりしますか	64（－1）	37（＋３）	０（－３）	０（±０）
6　クラスの誰とでもコミュニケーションを取ることができますか	47（＋27）	42（＋26）	10（－37）	３（－19）
7　クラスメイトや友人と会話をするとき、自分の考えや思いを伝えることができていますか	55（＋22）	46（+3）	０（－19）	０（－6）
8　クラスや学校生活、日常生活で多くの人とコミュニケーションが取れることは、今後の生活に役立つと思いますか	89（+8）	12（－5）	０（－３）	０（±０）

表２　アンケート結果（令和６年 11 月 21 日実施、小数第一位を四捨五入、( ) 内は５月実施アンケートとの差）

(2) 研究の成果

①　R－PDCAサイクルを生かした学習過程

図３のようなR－PDCAサイクルを生かした学習過程で授業を行うことによって、生徒も教師も目的意識を持つことができた。題材を設定する際には生徒との日常会話やアンケート等を分析し、生徒の思いや実態を正確に把握することが重要であることが分かった。また、事前指導や事後指導まで見通しを持って計画的に学習を進めていくことが重要であることが分かった。

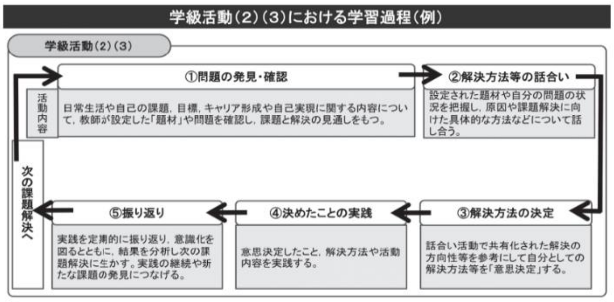

図３　中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　特別活動編で例示された学習過程（例）

②　対話的な時間の確保

自己との対話や他者との対話を行う時間を確保するためにＩＣＴを活用することで多様な考えに触れる機会と時間を確保した。特に、他者参照の視点を生かしたことで生徒は他者の意見を参考にしながら課題解決方法の内容を調整し、意思決定することができていた。

(3) 今後の課題

今後の課題は次の３点である。

①　生徒や集団の適切な実態把握

より効果的な題材を設定するために実態把握は必要であると考える。しかし、事前アンケート項目の吟味やアンケート結果の分析、それらを踏まえた題材の設定に課題が残った。R－PDCAサイクルの「R」の部分について、アンケート設計やデータ分析スキルが向上できるよう今後も研鑽を積んでいきたい。また、題材を設定する際に教師の思いを優先するのではなく、今、目の前にいる生徒たちにとって必要なことを題材に設定していきたい。

②　よりよい人間関係づくりについて

よりよい人間関係とは何かを生徒と共に具体的に考えていきたい。また、コミュニケーションスキルを高めることだけがよりよい人間関係につながる訳ではないので、よりよい人間関係づくりのための多様な要素についても学びを深めていきたい。

③　ＩＣＴ活用について

他者参照の視点を取り入れた授業について以下の点に留意していきたい。

・課題に対して１人でじっくり考えさせた方がよいか、それとも他者参照させた方がよいかを検討し、効果的に使い分ける。

・特定の生徒に強く影響を受けてしまうと考えられる場合はオンライン表計算ソフトのセル上の生徒名を非表示にするなどの工夫を行う。

【図の許諾について】
授業実践Ⅰの中で生徒が記述したワークシートの一部と授業実践Ⅱの中で生徒が入力した内容（図３）については研究の目的にのみ使用することとし、生徒及び生徒の保護者、所属校の校長から使用許諾を得た。